

原 著

成人集団における歯の喪失要因に関する後ろ向きコホート研究

野々山順也 橋本 周子 出分菜々衣
武藤 昭紀 齋藤 瑞季 嶋崎 義浩

概要：本研究は、幅広い年齢層を含む地域住民を対象に、10年間の歯の喪失に関わる要因を明らかにすることを目的として行われた。

愛知県某村で2001年度に歯科健診を受診した766名のうち、2011年度も同じ歯科健診を受診した382名を対象とした。個人単位の歯の喪失の要因を明らかにするために、歯の喪失の有無および3歯以上の喪失の有無を目的変数とした多変量ロジスティック回帰分析を行った。歯単位の歯の喪失要因の分析として、各歯の喪失の有無を目的変数とし、個人レベルの要因と歯レベルの要因を説明変数に用いたマルチレベルロジスティック回帰分析を行った。

個人単位の歯の喪失の有無は、年齢、現在歯数および歯ぐきの腫れの自覚が関連していた。3歯以上の喪失には、年齢、現在歯数、歯周状態、歯ぐきからの出血の自覚および喫煙習慣が関連していた。歯単位の歯の喪失は、個人レベルの要因として、年齢、性別、現在歯数、歯周状態および歯ぐきの腫れの自覚が関連しており、歯レベルの要因では、健全歯に比べて処置歯と未処置歯の喪失リスクが高く、歯の部位では下顎前歯部に比べて小白歯部と大白歯部の喪失リスクが高かった。

地域における歯科健診データを基にした後ろ向きコホート研究により、成人集団の歯の喪失に関わる要因が明らかになった。この結果は、今後の歯科健診において、歯の喪失リスクが高い者に口腔保健指導や歯科での定期管理を受けることを薦める必要性を示唆している。

索引用語：歯の喪失，成人集団，リスク因子，マルチレベル分析

口腔衛生会誌 69：77-85, 2019

(受付：平成30年10月26日／受理：平成30年12月4日)

緒 言

国民の健康づくり運動である「健康日本21（第二次）」は、個人の生活習慣の改善，個人を取り巻く社会環境の改善を通じて、生活環境，社会環境の質の向上を図り、健康寿命の延伸・健康格差の縮小を実現することを目指している^{*1}。歯・口腔の健康については、う蝕や歯周病等に対する具体的な目標値を設定することで、生活習慣病の予防に貢献し、国民の健康増進に寄与しようとするものである。

歯の喪失は、咀嚼能率の低下を招き¹⁾、栄養摂取に影響する²⁾。また、歯の喪失は、認知症³⁾や心疾患^{4,5)}、肺炎⁶⁾など全身疾患のリスクとなることが報告されている。健康寿命の延伸を健康施策の中心に掲げているわが

国において、全身の健康状態に影響を及ぼす歯の喪失を予防することは、国民の健康を増進するうえで重要な課題である。

歯の喪失が増加し始める成人期以降における歯の喪失原因は、う蝕と歯周疾患が多くを占めている^{*2}。これらの疾患は、一定の病期を経て最終的に保存不可能となり抜歯に至ることが多い。そのため、歯の喪失を予防するためには、歯の喪失に影響する要因を疾患の経過を含めて経年的に追跡し検討する必要がある。

日本の地域住民を対象とした研究において、年齢、喫煙習慣、現在歯数、歯周状態などさまざまな要因が歯の喪失に関連していることが報告されている⁷⁻¹¹⁾。また、海外における調査においても、日本での調査と共通する要因が歯の喪失と関連していた^{12,13)}。しかし、歯の喪失

愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座

*1 厚生労働省：健康日本21（総論），https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/s0.html（2018年9月20日アクセス）。

*2 財団法人8020財団：永久歯の抜歯原因調査報告書（平成17年3月），<https://www.8020zaidan.or.jp/pdf/jigyoo/bassi.pdf>（2018年9月20日アクセス）。